The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	グレアム・グリーン小説の研究 : 物語の継承と変容
Author(s)	鴨川, 啓信
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57886
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【63】

氏　　名	鴨川啓信（かもがわひろのぶ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　24075　号
学位授与年月日	平成22年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	グレアム・グリーン小説の研究－物語の継承と変容－
論文審査委員	（主査） 教　授　玉井　暲 （副査） 教　授　森岡　裕一　　准教授　片渕　悦久

論文内容の要旨

本論文は、イギリスの２０世紀現代小説界を代表するグレアム・グリーン（１９０４－９１）の主要小説を取り上げ、それらの小説が先行作家の物語内容と物語形式をいかに継承しあるいは変容させたのかを分析し、そしてさらにグリーンの小説作品とその映画版との間にいかなる共通性と差異が生じているのかを検証することにより、グリーン小説の特質を解明しようとした研究である。本論文の構成は、序論、第１部の４つの章、第２部の５つの章、結び、それに引用言及文献・フィルム一覧からなっており、その全体は、総頁Ａ４判で１３９頁、４００字詰め原稿用紙に換算して約４２０枚の論文である。

まず序論では、グリーン小説における継承と変容の問題は、２つの視点から考察できることを明らかにする。その一つは、グリーンの小説と他の作家の小説とをモチーフやジャンル的技法において関連性を検証するアプローチ。もう一つは、グリーンの小説について映画版とその原作とを比較対照するアプローチである。そして論者は、以下の章において、個別の作品の具体的分析を行う。

第１部「グリーンの小説に見られる継承と変容」は、４つの章から構成されている。その第１章「繰り返されざる旅――間テクスト性から見る『キホーテ神父』」では、セルバンテスの『ドン・キホーテ』のパロディとなっているグリーンの『キホーテ神父』を取り上げ、その主人公キホーテ神父が虚構の人物ドン・キホーテの子孫であるというありえない存在であることの意味を論じることにより、継承と変容の問題を考察する。第２章「スパイ・ハント――スパイ小説的文脈とグリーンの小説」では、スパイ小説というジャンルに特徴的な逃亡、追跡、裏切りなどのモチーフがグリーンの小説（たとえば『恐怖省』『ハバナの男』『ヒューマン・ファクター』など）に頻出するありようを検証し、その事実にもとづいて継承と変容の意味を考える。第３章「現実の幻影――スパイ小説の事実と虚構」では、グリーンの小説をスパイ小説と比較し、現実らしさを創出する意味とその技法について考察する。第４章「疑わしい話――ストーリーテリングと＜娯楽作品＞の分類」では、グリーンが自分の作品について、＜小説＞と＜娯楽作品＞とに二分しておきながら、その後みずから＜娯楽作品＞という分類をやめた状況と根拠を解き明かし、この＜娯楽作品＞という分類表記の消滅の意味を『ハバナの男』と『叔母との旅』の分析を通して考察する。

第２部「アダプテーションと相互作用」は、グリーンの小説の映画版と原作との比較検討を行う。第５章「グリーンの小説と映画――アダプテーションの誘惑と障害」では、グリーンの小説はその長編・中編小説のほとんどが映画化され、同時代の作家と比較すれば映画の製作本数が多い作家であるという事実を踏まえたうえで、グリーンの小説が果たして映画向きの題材であるのか否かを検討する。第６章「ウィスキー司祭を表すいくつかの表現――旅行記、小説、映画」は、グリーンの代表作の一つ『力と栄光』を取り上げ、旅行記『掟なき道』と映画版とを比較し、継承と変容のありようを詳細に観察することを通して、グリーンの問題意識と主題の表現方法を明らかにする。第７章「語りの内側と外側――『情事の終わり』への決着」は、グリーンのもう一つの代表作で技巧的な構成をもつ小説『情事の終わり』を取り上げる。一人称の語り手が出来事を回想して断片的に語る物語空間ではある種の混乱が出来しているが、映画版では外部からの視点が設定されていて、そのため映画化によるアダプテーションは決定性を志向する解釈を提示するものであることを明らかにする。

第８章「真実からの距離――小説『静かなアメリカ人』と二つのアダプテーション」は、小説テクストと二種類の映画版テクストを取り上げ、これらの３つのテクストと発表・製作時の政治状況との距離が物語表現にいかに関わっているかを分析する。第９章「物語の完成――小説と映画の『第三の男』」は、作品の完成状況を単純化するならば、映画の脚本が先に製作され、その後に小説版が完成したと見ることのできるこれらの二つのテクストを取り上げ、芸術作品における完成・終結の問題について考察する。

最後に、「結び：キホーテ神父、再び」では、異なる文学テクスト間の影響関係、小説版と映画版との間に発生する作品の意味に及ぼす影響関係に触れ、物語における継承と変容の問題の重要性を改めて強調して、本論を終えている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、イギリスの２０世紀現代小説界を代表するグレアム・グリーンの主要小説を取り上げ、その小説群に対して先行物語作品との間で成立している間テクスト性の観点から分析を行うことにより、また、小説作品のアダプテーションである映画版との比較検討を通して、原作小説が新たに獲得した意味あるいは逆に喪失した部分を考察することによって、グリーン小説の物語空間における継承ないしは変容の重要性を解明した研究である。グリーンの小説については、従来は宗教性に代表されるような深刻な側面を重視する傾向が強い研究状況のなかで、『力と栄光』『情事の終わり』などの代表作だけでなく、スパイ小説や娯楽小説などの大衆性を帯びた作品をも論の中心にすえてグリーンの小説固有の豊かな物語性の秘密に迫ろうとした本研究は注目に値する研究である。特に以下の論考などは、斬新な角度からの優れて興味深い論考として高く評価されよう。たとえば『キホーテ神父』が、みずから確立した間テクスト的物語空間のなかに先行作品セルバンテスの『ドン・キホーテ』への解釈を内包したメタ・テクストである側面を解明した論考。また、グリーンの小説について、２０世紀初頭に入って登場してくる初期スパイ小説からジョン・ル・カレ、イアン・フレミングらに至るスパイ小説の隆盛と衰退という大きな文学的・文化的脈絡を視野に入れて、その物語形式におけるジャンル的特質を解き明かした論考。さらに、『第三の男』の完成をめぐる映画と小説との間の優先権問題についての考察などである。

ただし、本論文において疑問点がないわけではない。小説間における継承と変容の問題と小説とその映画化による相互作用の問題との間を有機的に結び付ける論理がやや希薄なのが惜しまれる。また、結論の提示がもっと大胆であってもよかったであろう。

しかし、これらの点は本論文の優れた価値を損なうものでは決してなく、よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。